

外国語上級学習者における中間言語の研究: 教材開発への応用を意図して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42634

外国語上級学習者における中間言語の研究

— 教材開発への応用を意図して —

科学研究費基盤(C) 課題番号 24520612

研究代表者大瀧幸子 (金澤大学 ohtakis2011@gmail.com)

1 : 本研究の目的

科学研究費申請時に設定した本研究の目的は、「語彙と文法の学習だけでは補いきれない思考の流れ(論理構成)の表現の方策が個別の自然言語に存在し、その表現の方策が“目標言語らしい目標言語”を習得するための最後の難関であることを論証すること」であり、第二言語習得理論に対して学問的貢献を果たすことである。また、日本語と中国語の対照研究として「母語からの類推による誤用を排除し、目標言語において望ましいと評価される論理構成を習得させるために必要な語用論的特徴を考察すること」を通して、「それらの成果を上級作文の教材編集に活用すること」を目指すことである。

2 : 言語資料の収集と整理方法

上記の目的を達成するために、まずもっともふさわしい分析対象として、日本人の上級中国語学習者(新 HSK6 級合格または中国語検定試験 2 級合格)と中国人の上級日本語学習者(日本語能力試験 1 級合格)から、同一課題についての「目標言語による作文と母語による作文」を収集した。ついで、被験者ごとに同一課題の目標言語作文と母語作文をパラレルコーパスとして検索が可能となるプログラムへ流し込んだ。現在、パラレルコーパス内に収録した作文数は中国人被験者と日本人被験者各 80 名ずつ、10 課題につき一人 2 篇の作文を合わせて 3200 篇(文字数約 9 万字)である。パラレルの形態での検索を可能にするために、目標言語作文と母語作文の対応箇所に @ マークをふる基礎作業を行い、つぎに中国語用、日本語用にそれぞれ設定した誤用分析用 TAG (後述)をつける作業を行った。その間、パラレルコーパス検索プログラムの開発者と連絡を重ねつつ、プログラムの実際の運用を実現した。検索プロ

グラムを備えたパラレルコーパス名は、筆者と海外研究協力者である西安電子科技大学外国語学院陳会林助教授の名をとり、SACHIKO-rin とした。

3：誤用 TAG の設定

本研究の開始時の計画では、誤用 TAG を利用する分析を放棄するものとしていた。その理由は、(1) 誤用の所在については同一見解を得られるとしても、その原因については文脈背景をどう捉えるかによって評価が異なる。(2) 文脈背景を考慮する場合、学習者の表現意図との関連が明示されている必要があり、それは言語ごとに異なる表現形式がとられている。したがって、現在の個別言語研究の集積状況では普遍的な誤用 TAG の作成はかぎりなく不可能に近い。という2点に集約されている。誤用 TAG の作成を放棄するかわりに、2年次からは第二言語習得理論に基づいて開発されてきている実験手法を採用して、誤用例分析を行う計画をたてていたところ、その実験にもちいる機器やモデル作文の作成方法に関して、1年間では本研究の研究分担者や協力者のあいだで対照研究を実施できるところまで、環境を整えられそうにないことが判明した。この想定外のトラブルに関しては、今回の科研終了後も検討を継続し、北京師範大学外文学院日本語系の諸先生からの協力継続と「脳と認知科学研究所」と連絡をもつ漢語文化学院の援助、および金沢大学人間社会環境研究科の認知科学コース所属教員の協力を得て、研究環境の整備にあたる予定である。

さて、そこで、今回の科研研究では、再度誤用 TAG 作成方針を検討しなおすこととし、主に海外協力者翟東娜教授との議論を通して、4つの設定方針を決定した。以下、各設定方針と、その誤用例分析における学術的有効性について解説する。

(1) 正文を対象とする文法研究 TAG とは一線を画し、誤用例を対象とする「頻出する誤用タイプ」を整理した誤用 TAG を設定する。

— 文法研究用 TAG は、当該個別言語で無限に存在する正文に対して付加されるものであり、その用例は豊富な数量と潤沢な内容を備える。それに対して、誤用例は言語形式上では同一の誤用に見えても、文脈背景からその原因を判定する必要がある、TAG の種別を細分化した場合、

検討対象として取り上げられる用例数が集まりにくい。

作文授業での誤用例を無選別のまま収集する方法をとるならば、フレーズレベルで出現する誤用例ならば的確な組織づくりにより大量に集められ、かつ数量的に圧倒的多数を占める初級学習者の誤用例 TAG の付与付け作業もある程度客観的な結果を得られよう。例えば、北京語言大学漢語国際教育技術研究開発センターによる HSK 中間言語コーパス検索システム「(検索ページ名) HSK 動態作文語料庫」は世界各国で実施された HSK テストの作文 1 万篇を対象として品詞 TAG および単語・フレーズ・単文・段落ごとの誤用をタイプ別に検索可能にしている。しかしながら、初級で頻出する単文内かつフレーズレベルの誤用は「学習言語に対する知識の欠如」が原因であり、本研究が分析対象とする誤用例「母語の思考の流れからの影響を受ける誤用例」からは除外すべき誤用例とみなせる。また、機械的に付与するシステムがすでに完成している正文として見た場合の品詞分類 TAG は文法タイプ別 TAG のように文脈の意味を反映してはいないため、誤用の原因分析が求める情報を提供してはいない。したがって、誤用例の原因分析のための用例収集は異なる方法をとらざるを得ない。その方法とは、単一言語の誤用例だけではなく、母語作文とパラレルになった目標言語作文を収集し、「本来何を表現したかったのに、このように間違えている」という情報を得る方法である。

ただし、HSK 動態作文語料庫における誤用例タイプ分類も、学習者の母語別の検索が可能であり、即、各国の外国語教育の初級教材作成へ反映しうる点で極めて有用な成果であることに変わりはない。また、中級から上級へ習熟度が高まっていく過程で、どのフレーズレベルの誤用が「残存例」として長く出現するかという言語事実は、「修得の困難性に反映する母語からの影響」として捉えなおせる可能性が残る。

(2) 日本人の中国語作文と中国人の日本語作文に現れる誤用例のタイプの違いを別個の TAG リストとして記す。

当初から母語と目標言語との組み合わせを固定した誤用例コーパスとしては、新年度から筆者も参加する予定の「日本語誤用例と日本語教育研究会」(会長：関西学院大学于康教授)が開発作業中である。現在、中国人学習者による日本語作文文字数千五百万字有余をデータベースと

する日本語誤用例コーパスとの連携については、SACHIKO-rin の開発状況の項目で詳説する。作業者はまず正文 TAG を用いて作業を開始しているが、于康会長は現在、正文 TAG とは異なる誤用例 TAG の大規模開発プロジェクトに参画中とのことである。この研究会でも、正文 TAG では誤用例 TAG の代用をなしえない可能性を認めている証左といえる。

SachikoRin のパラレル検索（母語原文と目標言語作文）でも、中国人日本語学習者の作文に特に頻出する誤用タイプと日本人中国語学習者の作文に特に頻出する誤用タイプ（日本語の連体活用形、中国語のアスペクト助詞「了」など）の間には、不对称現象が明確に表れる。したがって、それぞれの誤用例 TAG リストを考案する場合も、異なる構成をもつものと仮定している。

（3）目標言語作文の論理的矛盾が大きく、評価者が文の意味を推察できない場合には、母語作文から推定した意味に基づき誤用例 TAG を選定する。

— 本研究がとりあげる中間言語は、日常会話には不自由のない中級から上級学習者の作文である。それでもなお、卒業論文レベルの長文では段落の連結が乱れたり、抽象的議論を展開する場合に文の主題の取り上げ方が不明瞭になったりすることがあり、そういう誤用例こそ、本研究がもっとも分析を加える価値を認める誤用例である。その誤用 TAG は、学習者が何を言いたかったのかを母語作文から察知する以外、判定する方法がない。

（4）母語作文対照時にのみ選び、かつ双方の作文の対応箇所にそれぞれ付与する誤用例 TAG として、中国語誤用 TAG にも日本語誤用 TAG にも同一の「冗余+（過剰+）、脱落-（脱落-）、日语直译（漢語直訳）」を設定した。

— これらの TAG は原文にも学習言語にも付与する TAG である。過剰 TAG と脱落 TAG は、学習者がみずからの語彙力不足や表現力不足を自覚して、目標言語で異なる表現法をとろうとした場合に生じる技法（厳密に言えば誤用ではない）を判定する。過剰 TAG は目標言語では注釈を添えなければ十分に表現できないと判断し、原文にない言辞を目標言語内に加えた部分をマークする。原文内での TAG づけ位置は、スペースを空けて TAG のみ挿入するものとする。脱落 TAG は目標言語では表

現しにくく回避される母語表現を判定するものである。表現のパラフレイズをそっくり避けて別の視点から表現しなおそうとする場合、すべて抹殺してしまう場合とがあり、目標言語内では母語とほぼ対応する箇所にスペースを空けて TAG づけ位置を指定し、TAG のみを挿入する。いずれも、母語と目標言語がパラレル表示されるコーパスを利用してこそ、比較的簡単に多くの数量を集められる誤用例である。また、日本語を目標言語とする作文での漢語直訳 TAG は、和製漢語や漢語語幹に「する」を付加すべき日本語動詞の用法に頻出し、中国語を目標言語とする作文での日語直訳 TAG は、和製漢語と同型の中国語異義語が存在する場合に頻出する。これらの誤用は上級になってもまだ多く残存し、日中両言語における同型異義語の研究に有用な考察対象例を提供する。

4：パラレルコーパス開発状況

下記の6段階において、(1)(2)(3)までは、于康・田中良・高山弘子《方法工具与日語教育研究叢書 加注標籤軟件与日語研究》浙江工商大学出版社(2014.3)および于康《方法工具与日語教育研究叢書 語料庫的制作与日語研究》浙江工商大学出版社(2013.3)で解説されているプログラムを使用している。SACHIKO-rin のパラレルコーパスとしての検索プログラムを設計する部分には、これまで大瀧科研で開発してきたメモリ内で動く GPS、及びネット上での共同作業を可能にした eden-night.bird の資源(p63で紹介されている「Dataholder for CJData」など)を活用しているが、前半部分(1)(2)(3)は于康氏の許可を得て、プログラム開発者の田中良氏より指導をうけつつ作業を進めた。

(1) 言語資料ファイルの整理と TXET ファイルの作成

「母語〇〇語*＊課題」「目標言語〇〇語*＊課題」として組み合わせる母語作文と中国語作文のペアがすぐ取り出せるよう、ファイル名を工夫した。

(課題リストの10項目は、劉玲論文中の p4,p104 に紹介されている。)

(2) 添削プログラム

作文添削ソフト[TNR_WritingCorrection2014]のなかに、(1)の TEXT ファイルをとりこみ、操作マニュアルどおりに添削をおこなった。

(3) TAG づけプログラム

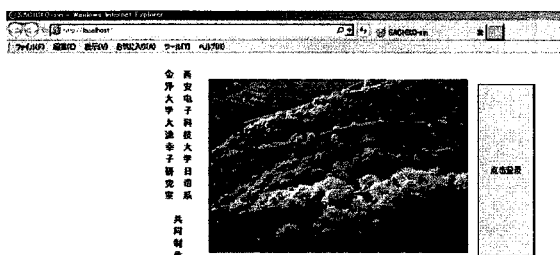
TAG リストを研究者自身が自由に記述できる「tagjpnlst」が付属していることは、このプログラムの最大の利点である。利用者は各自、自分の創案した TAG がうまく機能するかどうかを、自らの手で確かめられる。(2) で添削完了したファイルを[TNR_JapaneseErrorCorpus Tagger2014]内へ読み込み、自分が選択した TAG リストを用いて作業する。

(4) パラレコーパスプログラム

現在の作成状況では、すでに学習者の名称リストは符号化され、検索結果に実名が表示されないよう、個人情報秘匿の処理が完了している。その検索画面は次のごとくなる。

1 ; 開始画面

プログラムをパソコン
C ディレクトリから
起動

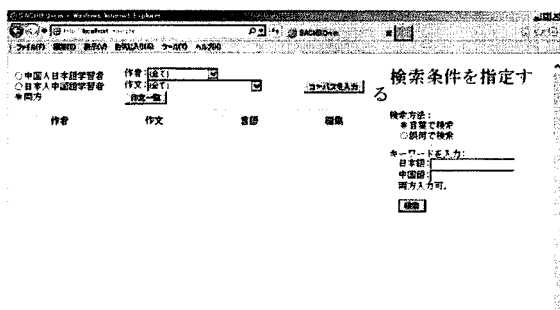


SACHIKO-rin
中国語・日本語学習者誤用コーパス

2 : 検索開始画面

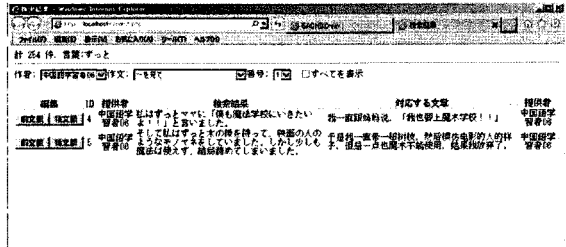
検索対象に両方を選択
すると両者の間違
い方の差がわかりや
すい。言葉でも、誤
用でも検索可能。

(TAG リスト選択)

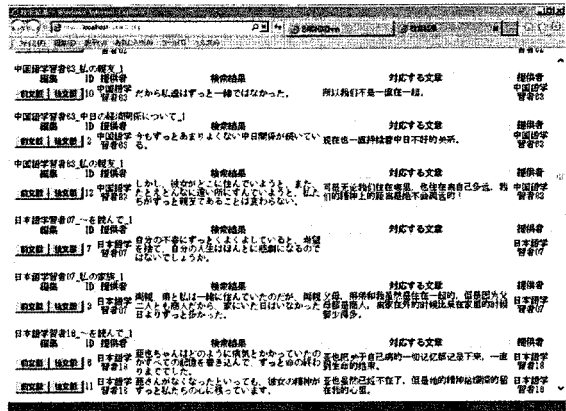


3：言葉「ずっと」

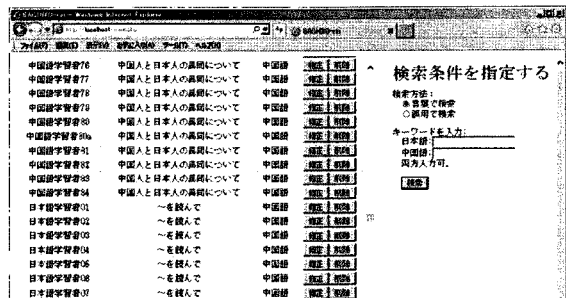
合計 254 例、最初の 1 ページ筆頭は最初に検索された用例になる。ここでは日本人の日本語本文が採録されている。
(番号 1 = 学習者が一回目に提出した作文)



4：中国語学習者と日本語学習者の作文 双方の画面 ID7 の対応する文章が 空白の作文は誤用 TAG として「過剰」が付与される。



5：コーパスを増量修正するための画面 2：検索開始画面で作文 一覧をクリック。



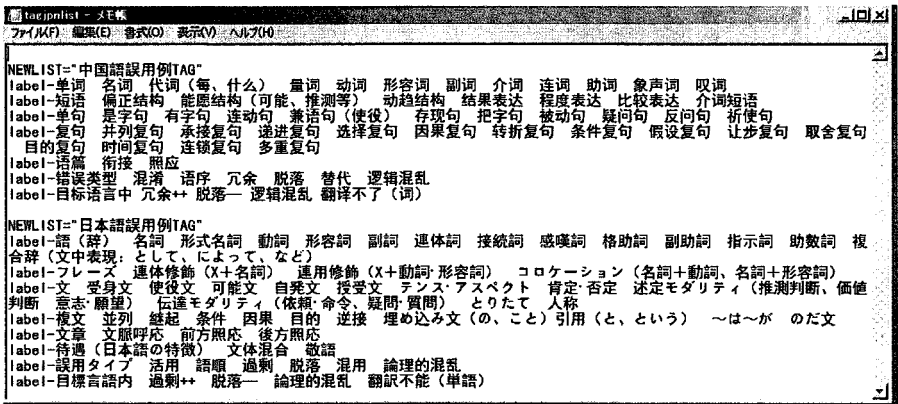
5：「誤用で検索」システムの構築

「誤用で検索」を選んだ場合も、検索窓口の形は変更がない。ただし、窓口にはカーソルをあてると、日本語では日本語誤用 TAG リストがリボ

ンの形であらわれ、中国語では中国語誤用 TAGG リストがリボンで現れる。そこからそれぞれ TAG を選択し、検索画面を出すことができる。この検索機能を使用するために、3 段階の作業をおこなった。

(1) tagjplist の誤用例版 (日本語と中国語) を決定。

日本人中国語教師と中国人日本語教師とが 3 名ずつ、30 篇程度の作文に tag づけをしつつ討論を重ねた。以下は試用中の誤用 TAG リストである。



(2) [TNR_JapaneseErrorCorpusTagger2014]を用いて、TAG 付け作業を行う。この画面は、本稿 4 (1) (2) (3) で紹介した于康、田中良氏の著作に示されているとおりである。

(3) SACHIKO-rin のコーパスとして TAG づけの TEXT を流し込む。

この最終段階が現在完成しつつあり、研究代表者をはじめとし、TAG の点検がすすんでいる。プログラマーの手で TAG づけの表現そのものをプログラムにあう言語に書き換えているところであり、本科研の経費と年度内には完成をみる予定である。

6 : 科研報告のまとめ

本科研での中間言語パラレルコーパス作成に参加してくださった協力者の諸先生、大学院生は各自それぞれ自らの研究活動にこのコーパスづくりで得た言語情報を反映している。筆者が指導に加わった修士学生

のうち、論文の資料として SACHIKO-rin のデーターを利用した学生数は 5 名以上いる。『応用言語学研究論集第 8 輯』のなかにも利用した論文が投稿されているが、「誤用による検索」が本格的に機能しはじめれば、更に各方面の研究資料として有用な情報が入手できるようになるのは疑いのないところである。

今回は紙幅の制限（予算）もあり、中間言語の考察に利用した論文をこの論集に採録していないが、次号はパラレルコーパスを活用した論文のみの特集号として編集する予定である。研究代表者が職場を移すため、『応用言語学研究論集第 9 輯』の刊行までには多少時間的ブランクが生じるが、27 年度中には中国国内で単行本として研究論文集を発行したいと願っている。

最後に、今回の科研研究の作業に協力して下さった諸先生と大学院生のみなさまに心からの感謝をささげます。